



教職大学院 Newsletter No.130

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.2.15

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2020 Spring Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2020
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui

実践研究 福井ラウンドテーブル

2020 spring sessions

15(sat) 13:00-17:40

16(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2020.2.15-16

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

共催 社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会・福井県光コンベンションビューロー

内容

実践研究福井ラウンドテーブルの二十年 (2)

実践し省察するコミュニティ 実践研究福井
ラウンドテーブル 全体スケジュール (5)

ZoneA 学校 (6)

ZoneB1 教師教育 (7)

ZoneB2 教師教育 (8)

ZoneC コミュニティ (9)

ZoneD 授業研究 (10)

省察的実践学会 準備会 (11)

Round Table Cross Sessions (12)

実践し省察するコミュニティを結び支える (13)

ラウンドテーブルの歩み (15)

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グロ
ーバルコミュニティへの誘い (17)

アーカイブ (19)

国際展開 -アフリカ・ラウンドテーブルの報告 (28)

実践研究福井ラウンドテーブルの二十年 その2
歴史的な展望のために (30)

基金のお知らせ (32)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2020年2月の開催をもって38回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれた2日目の各ゾーンのセッションを経て、最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行います。この3日間で、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

実践研究福井ラウンドテーブルの二十年

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長

柳 沢 昌 一

今回のラウンドテーブルの準備のサイクルの中で、この2020年が、ラウンドテーブルが出発して20年目の節目に当たることに気づきました。あらためてラウンドテーブルの展開、そしてその意味について考えていく機会にしていきたいと思います。

はじまり 2001

実践への問いを深め交わすためのラウンドテーブルは、次のような呼びかけから始まりました。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。

言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。

話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

今回のパンフレットにもあるこの呼びかけは実践研究福井ラウンドテーブルが、20年前、多様な分野の実践者が集った、小さなグループセッションで出発したときから変わりません。当時福井では社会教育、保育、学校教育、そして大学において互いの実践の展開を語り合い記録化して共有し実践の力を培って行く小さな取り組みの渦が生まれてきていました。そうした小さな渦を結びよりひろかれた場で実践の展開を交流していく。より長い複雑な実践の展開を問い返し発展させて行くためには長期的な実践記録の支えが不可欠となる。そしてそうした長い実践の省察を、より広いコミュニケーション圏へとひ

らく新しいセッションのデザインと記録が必要となる。そうした必要から出発したその集いは 20 名ほどの小さな実践交流会として出発しました。

持続的な展開・新たな構成

2001 年は学校改革実践研究という大きな展望に立った、しかし 4 名の入学者 4 名の教員による大学院の小さなサブコースの出発の年でもありました。ラウンドテーブルはこのサブコースのサイクルの中に位置づけられることで、そしてこのサブコースが教職大学院へと発展していくことによって持続的に重ねられて行くことになります。

2007 年の教職大学院の発足を経て日曜日の分野を超えたクロスセッションに先立って土曜日に分野ごととテーマごとのセッションが構成されるようになりました。ポスターセッションも土曜日の午後、最初のパートに置かれ多様な参加者の実践を俯瞰できるようになりました。ラウンドテーブルに高校生、中学生、そして小学生も参加して、互いのプロジェクト学習の展開を交流する場も生まれてきました。専門職としての営みの深まりと市民としての協働探究を結び新しいパブリックなコミュニケーション、セッションの言葉を借りるならパブリック・ラーニング、相互的な〈行為の中の省察〉を開いていくことにつながる取り組みにつながることに、私たちは次第に気づいていくことになります。

クロスセッションの構成とその意味

- ①実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ②そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業ほか)
- ⑤小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No. 11, 2009. 3. 31、本号 14 頁掲載)

各地での取り組み

福井での展開とも関わって、実践の長い展開を少人数でじっくり聴き合うラウンドテーブルが、さまざまな地域で展開されていくことになります。東京、静岡、奈良、北海道、山梨、長野、岐阜、福島、長崎、そしてフィリピン、マラウイ。福井での経験に触発されながらそれぞれの地域の状況に即したラウンドテーブルが広がっていくことになります。奈良女子大学・岐阜聖徳大学との連合教職大学院の展開は、来年度出発する東京・金沢における教職大学院のサテライトの実現へとつながっています。実践の渦中にありつつ、実践の展開と意味を問い直し、長い展望を拓いていく。専門職としての学びの新しい在り方への求めは、大きな変動に直面する多くの職域において確実に広がってきています。ラウンドテーブル、長期実践研究報告、実践の中での省察の組織化を軸とする教職大学院の学びをそれぞれの場で実現しようとする取り組みが確実に進んできています。

国際的な広がりとそれを支える組織という課題

そうした動きのさらに新しい展開として、実践の中での省察、省察的授業研究の展開と組織をめぐる関心の世界的な広がりがあります。フィリピンからポリンさんが留学されて以来、海外からの参画が広がってきています。各国からの現職教員研修生や留学生、JICA アフリカ地区向けの授業研究の研修、シンガポール・タイからの研修、そして現在進行しているエジプトに日本型学校を創設するプロジェクトに関わる 600 人を超える教員研修が進み、フィリピン・マラウイでは継続的にラウンドテーブルが開かれるに至っています。ショーンへの関心、省察的实践への探究の広がりを感じるならば、専門職の実践的な力量形成への問いと実践が一国の内部に閉じるものではなく、世界共通の課題であり挑戦であることは、ある意味では当然のことととらえるべきかもしれませんが、それが自分たち自身の取り組みと関わって現実のものとなっていく事態に直面しています。そしてこうした広がりを支える組織への自己展開というより困難な仕事に立ち向かうことが求められています。

20 年を経て、より長い歴史的展望をひらくために

20 年という積み重ねは、たしかにけっして短い年月ではありませんが、しかしその理念にかなう公教育、ひとり一人の主体的な学びが通い合い協働社会を自らつくり発展させていく力を培うための学習をすべての人々にひらかれた形で実現していくという近代教育の未完のプロジェクトへの曲折に満ちたしかし不断に進めるべきプロセスの中で、先人の営みを引きつぎ、次の世代に大切につないでいくべき持続的サイクルの一つであると思います。そしてそうした公教育の歴史的な展望の中で問い返すことによって、ラウンドテーブルの意味もまたより確かなものになると思っています。そうした歴史的な省察にはまだ準備の時間がかかるとは思いますが、後半部分で、そのための覚書を記しました。時間が許す方はお読みいただくと幸いです。

実践研究

福井ラウンドテーブル spring sessions 2020

2/15(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ー対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出すー

B1 教師教育:働き方改革と学び合う学校づくり ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

B2 教師教育:専門職としての学びのプロセス ー対人援助職のための省察的実践の場を組織するー

C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする

ー地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるかー

D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う *knowledge fair*

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る *symposiums*

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める *forums*

18:00-18:40 省察的実践学会準備会

2/16(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●2/16の *session IV*の参加についてのお願い=午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。

原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

2/16 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ー対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出すー

会場：教育系1号館 2階 コミュニティプラザ

Zone Aではこれまで、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う学校改革のビジョンにもとづき、「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げ、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル2020 Spring Sessionsでは、教師、子ども、保護者、地域社会がともに学び合うコミュニティを学校にデザインする上で鍵となる「ミドルリーダーシップ」に焦点を当て、「Leading from the Middle: ミドルからのリード」をいかに実現し、そしてサポートできるのかを、参加者のみなさまとともに協働探究していきます。特にシンポジウムでは、「21世紀の学び」についても確認しながら対話と議論を重ね、これまでZone Aで蓄積してきた知見をさらに前進させていきます。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <教育系1号館 1階 13講義室>

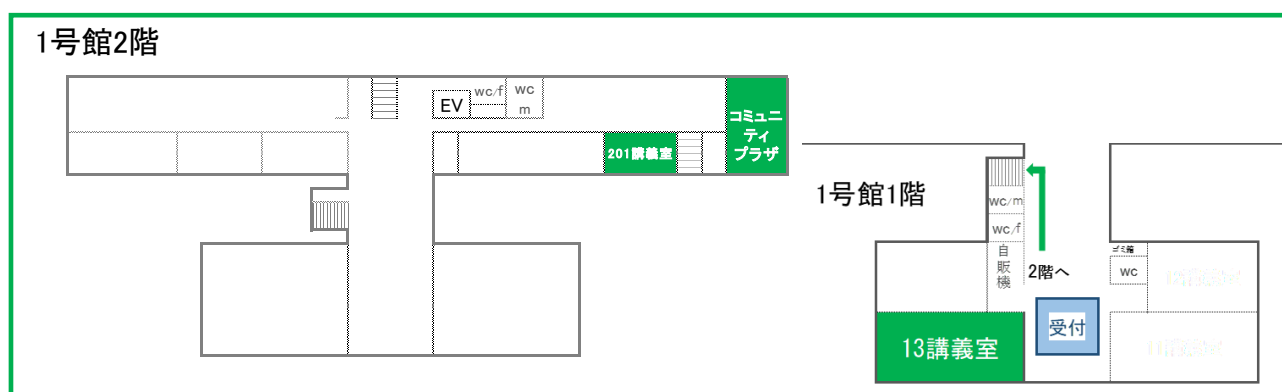
Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <教育系1号館 1・2階フロア>
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館 2階 コミュニティプラザ>
21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

<シンポジスト> 東京都板橋区立赤塚第二中学校・教諭 名地 太輔 氏
新潟大学教育学部附属新潟中学校・教諭 上村 慎吾 氏
信州大学教育学部附属松本中学校・副校長 宮下 哲 氏
<コーディネーター> 福井大学連合教職大学院・准教授 木村 優 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <2階コミュニティプラザ、201講義室>
対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出す

Session IIの議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。



Zone B1 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

会場：教育系1号館 6階 コラボレーションホール

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職に伴い、若い世代の教員を支え育てる組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革のなかにあります。他方で、教員の働き方改革も急務とされています。こうした状況のなかで教育に携わる者の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされているのではないのでしょうか。

Zone B1 では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、教師の働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校のあり方について展望を拓いていきます。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス<教育系1号館 6階 コラボレーションホール>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア)<教育系1号館 1・2階フロア>
全国教職大学院、教員研修センター、教育委員会ほか

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館 6階 コラボレーションホール>
組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント

<シンポジスト> 福井県教育庁学校振興課・課長 小林 利幸 氏

福井県教育総合研究所・所長 牧野 行治 氏

福井市明道中学校・校長 (福井県中学校長会会長) 北川 裕之 氏

<コメンテーター> 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課・課長 柳澤 好治 氏

<コーディネーター> 福井大学連合教職大学院・教授 淵本 幸嗣 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館 6階 コラボレーションホール>

<実践報告者> 福井大学連合教職大学院・准教授

(教育学部附属義務教育学校・後期課程統括研究主任) 柳 博恵 氏

福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程教務主任

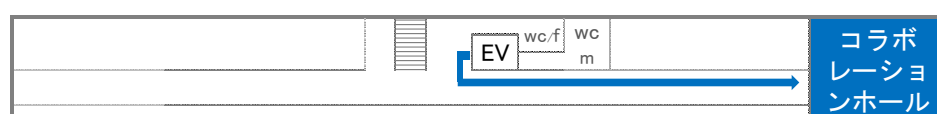
柳本 一休 氏

越前町立宮崎中学校・教諭 (第3学年主任、進路指導主事)

幸坂 浩 氏

シンポジウム及び実践報告を踏まえ、小グループで協議します。

1号館6階



Zone B2 教師教育

専門職としての学びのプロセス

—対人援助職のための省察的実践の場を組織する—

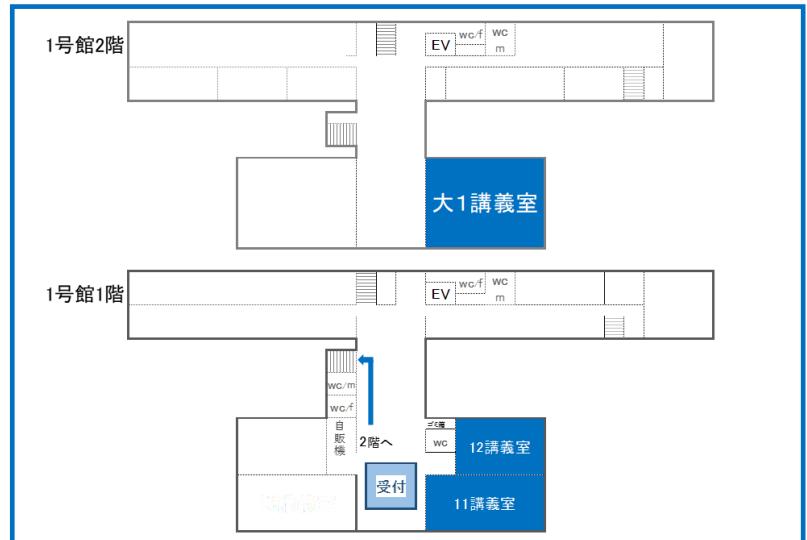
会場：教育系1号館 2階 大1講義室、1階 11講義室・12講義室

教師や心理職、保育士・看護師・介護士といった専門職は、人との係わり合いがその仕事の根幹を成す対人援助職です。対人援助職においては、刻々と変化する状況の中で、その時々状況と相手に合わせた支援を行なうことが求められることから、確立された特定の知識や技術を学びそれを実践に応用するという枠組みの中だけで、その資質・能力を培うことはできません。対人援助職としての専門性を培うためには、実際の係わり合いの場面に身を置くこと、実践の場での自身の行為について振り返り、自身の行為がもつ意味やそうした行為を支える自身の認識の枠組みについて状況の中で検討すること、そうした検討を通じて次の支援の方向性をあらためること、そうした実践と省察の絶え間ない往還を欠かすことはできません。

多くの対人援助職の養成課程においては、学生が実践を行なう機会としての「実習」がそのカリキュラム内に位置付けられていますが、そうした「実習」が省察的実践者としての対人援助職の成長を支えるものとなるためには、どのような取り組みが求められるのでしょうか。

今回のラウンドテーブルでは、学生は実習で得た経験をいかに捉え、振り返り、意味付けているのかについての学生自身の語りを聴くことを通じて、対人援助職としての学びのプロセスを探り、参加者の皆様と議論を深めたいと思います。また、多様な領域における専門職としての学びのプロセスを交流することを通じ、対人援助職としての省察的実践の場をいかに組織するのか、対人援助職養成のあり方についても議論を重ねていきたいと思います。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	＜教育系1号館 2階 大1講義室＞
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレτζフェア)	＜教育系1号館 1・2階フロア＞
		福井県内の学校	
Session II	14:20-15:50	シンポジウム	＜教育系1号館 2階 大1講義室＞
		〈シンポジスト〉	福井大学連合教職大学院・院生 家高 里佳 氏
			甲南女子大学・学部生 山崎 桃果 氏
			岐阜聖徳学園大学・学部生 古田 悠人 氏
		〈コーディネーター〉	福井大学連合教職大学院 廣澤 愛子 氏
		〈コメンテーター〉	早稲田大学 村田 晶子 氏
Session III	16:00-17:40	フォーラム	＜教育系1号館 1階 11・12講義室、2階 大1講義室＞
	16:00-17:40	小グループ形式での学生による実践報告	
		愛知教育大学、一宮研伸大学、岐阜聖徳学園大学、甲南女子大学、	
		玉川大学、中部大学、福井大学、他	
	17:00-17:40	振り返り（学生／教員・実践者）	
		学生グループでは、多様な領域における専門職としての学びのプロセスを	
		交流することの意味や、そこで見えてきたことについて振り返り、明日から	
		の実践の展望につなげていきたいと思います。	
		教員や実践者のグループでは、Session II や III を踏まえ、対人援助職として	
		の省察的実践の場をいかに組織するのか、対人援助職養成のあり方について、	
		参加者の皆さまと議論を深めたいと思います。	



Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

ー地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるかー

会場： 共用講義棟 (K310 K320 K330)

この間 Zone C では「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマを長期に渡り検討しています。前回は「地域と学校のつながりを編み直す」というサブテーマで、地域と学校それぞれの立場からの実践報告を共有しながら本テーマについて探究を行いました。その探究のプロセスを踏まえ、今回は「地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか」をサブテーマに、お互いの取り組みから学び合いたいと思います。

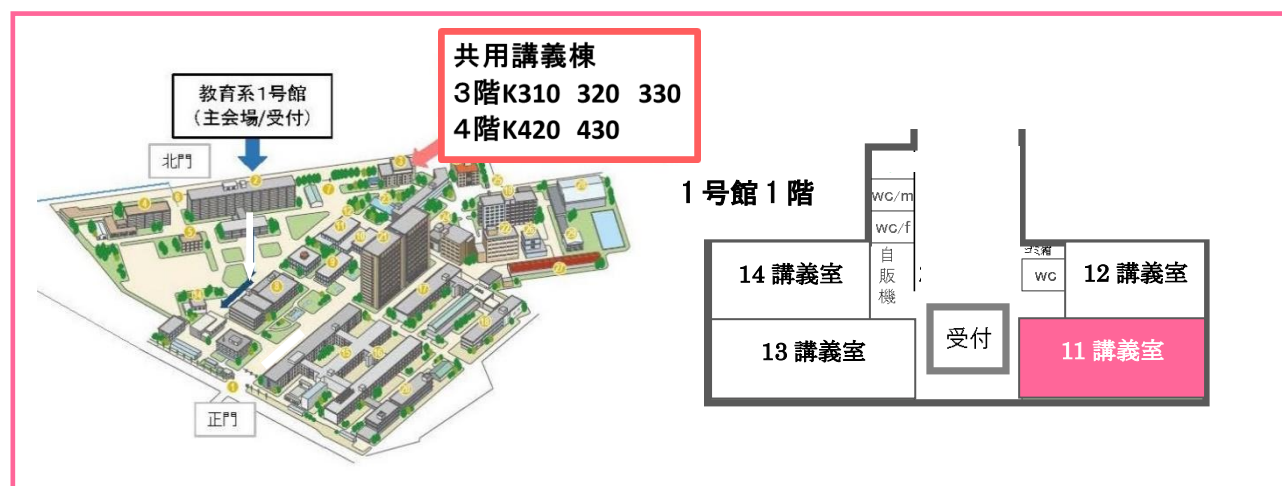
地域には様々な人がいて、その人たちは地域の多様なコミュニティの活動をつくり支えています。そうした人々の力が発揮できる学びは、どのように支えることができるのでしょうか。また、いま地域の様々な活動は、世代継承の問題に直面しています。世代継承のサイクルは、どのように生み出すことができるのでしょうか。

地域のなかの多様性と、長期的展望の観点にたちながら、地域のこれからを拓く担い手を、いかにコミュニティの活動を通して育み支えていくかを考え合いたいと思います。住民との対話を通したまちづくりをコーディネートしている市の職員の方の取り組みや、地域の多様で多層なコミュニティの学びをコーディネートする公民館主事さんの活動、そして会場のみなさんそれぞれの取り組みから、共に考え合いたいと思います。

Orientation	13:00-13:10 ガイダンス	＜教育系 1号館 1階 11 講義室＞
Session I	13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) 福井県内の公民館、福井大学探求ネットワーク 他	＜教育系 1号館 1・2階フロア＞
Session II	14:20-15:50 シンポジウム 地域のこれかれを拓く担い手をいかに育てるか	＜共用講義棟 K310＞

〈シンポジスト〉 福井市和田公民館・館長 北島 喜一 氏
福井市役所 国見地区地域担当職員 西澤 公太 氏
〈コーディネーター〉 福井大学連合教職大学院 富永 良史 氏
福井大学連合教職大学院 矢内 琴江 氏

Session III	16:00-17:40 フォーラム	＜共用講義棟 K320 / K330 / K430＞
	Session II での課題の提起を踏まえ、5～6 人の小グループとなり実践を交流します地域における多様な実践から学び合います。	



Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

会場：教育系1号館 2階 大2講義室 / 2階 203・204・206講義室

これまでZone D では、「子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか」というテーマで、特に探究的な学習を支えるためにどのように授業研究・保育研究を組織していくと良いのか考えてきました。今回は、このテーマを掘り下げて考えていく視点として、「新しい世代を支え学びあう授業研究」に焦点を当て考えます。シンポジウムでは、「新しい世代を支え学びあう授業研究」に取り組んできた実践報告に加え、エジプト・アラブ共和国及びマラウイ共和国にて授業研究に取り組んでいる立場から、日本の授業研究の特徴を浮き彫りにするとともに、我が国の授業研究を牽引してきた立場から、今後の授業研究の方向性について探っていきます。シンポジウムで出てきた問題提起を踏まえて、フォーラムでは、保幼小・中高・特別支援という3領域に分かれ、各領域での話題提供を手がかりに、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション <教育系1号館 2階 大2講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <教育系1号館 1・2階フロア>

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館 2階 大2講義室>

新しい世代を支え学びあう授業研究

<シンポジスト> 福井市至民中学校・校長 小林 真由美 氏

千葉県立保健医療大学・准教授 福島 昌子 氏

<ディスカサント> エジプトカイロ大学文学部日本語専門翻訳専攻長 アリ リナ 氏

マラウイ共和国ナリクレ教員養成大学 校長代理 マティアス ジャヌアリー 氏

前教職員支援機構・次世代教育推進センター長 大杉 昭英 氏

<コーディネーター> 福井大学連合教職開発研究科・教授 三田村 彰 氏

福井大学連合教職開発研究科・講師 高阪 将人 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館 2階 203・204・206講義室>

多様な授業研究・保育研究から学び合う

Session II での話題提供と校種別の実践報告を受け、小グループで実践の交流を行います。

A 保幼小の実践に学び合う

福井佼成幼稚園・園長 大柳 世津子 氏

福井市啓蒙小学校・教諭 渡邊 淳子 氏

B 中高の実践に学び合う

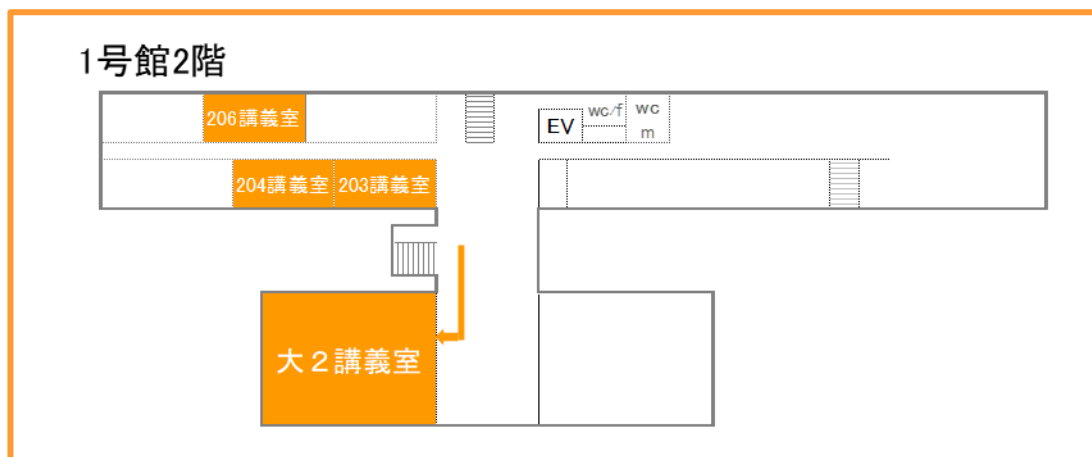
福井市森田中学校・教諭 木下 慶之 氏

栗田 由紀枝 氏

福井県立武生高等学校・教諭 辻崎 千尋 氏

C 特別支援教育の実践に学び合う

福井市足羽小学校・校長 小杉 真一郎 氏



18:00-18:40

会場：教育系1号館 6階 コラボレーションホール

省察的实践学会 準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月に〈省察的实践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。2017年2月・6月、2018年2月・6月、2019年6月のラウンドテーブルにおいて準備会を行い、学会の趣旨を共有しました。今回の準備会では、この間準備を進めてまいりました『省察的实践記録集成』と学会紀要『省察的实践研究』に関して報告いたします。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

2/16

(sun) 8:20-14:00

Session IV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。

（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | |
|--------|-------------|
| ① はじめに | 8:30-8:40 |
| ② 自己紹介 | 8:40-9:00 |
| ③ 報告Ⅰ | 9:00-10:40 |
| ④ 報告Ⅱ | 10:40-11:40 |
| ⑤ 報告Ⅲ | 12:20-14:00 |

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。

報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 ,2009.3.31)

ラウンドテーブルの4重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。

Co-reflection in and on longitudinal process of practice

II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。

Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice

I II →省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル

III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。

Cultivating Communities of Public and Reflective Learning

IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2020.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第 1 回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第 3 回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第 4 回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第 5 回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第 6 回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004（第 7 回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 8 回 参加者 100 名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 9 回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ（第 10 回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 15 回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 16 回）稲垣忠彦
- 2009.6.27.28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 17 回）5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 20 回 参加者 300 名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 21 回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions（第 22 回）（名称を変更する）
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions（第 23 回）参加者 450 名を越える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions（第 22 回）（名称を変更する）

- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
- 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions (明治大学)
- 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
- 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
- 11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
- 7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
- 11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
- 10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.15-21 マラウイラウンドテーブル,
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第 35 回) 参加者総数 476 名
- 10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.23 マラウイラウンドテーブル,
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
- 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
- 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)
- 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第 36 回) 参加者総数 930 名
- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions (第 37 回) 参加者総数 426 名
- 11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良, 早稲田大学教育実践研究フォーラム
- 12.12-13 アフリカ (マラウイ) ラウンドテーブル 2019
- 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い

ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して



福井大学連合教職大学院准教授・木村優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの2001年3月、教師教育にかかわる20名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年2月と6月に開催している**実践研究福井ラウンドテーブル**を生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして**実践コミュニティ**¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていっています。ラウンドテーブルの創世記には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、

学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代（Society5.0）、超AI時代、VUCAワールド²等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする**機構**が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで**変化に向けた挑戦**が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための**省察的機構**³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「**坩堝（るつぼ）**」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネッ

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー、2002）。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン、2017）。

トワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない**新しい知の創造**であり、**新しいかかわりの現れ**です。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、**分散型コミュニティ**のデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。

福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、**教育改革のグローバル・コミュニティ**を築く戦略なのです。

2014 年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017 年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21 世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

Archive

—アーカイブ—

2009年3月1日（日）に開催された「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル」に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.11（09.03.31）からご紹介いたします。

Newsletter No.11（09.03.31）より

ラウンドテーブルを通じた学びとラウンドテーブルの展開

—複雑にデザインされたラウンドテーブル—

福井大学大学院教育学研究科 2 年 量谷 亜由美

今回のラウンドテーブルを振り返って

私も先日のラウンドテーブル（ラウンド）に参加させていただきました。このラウンドテーブルは、私が大学 2 年の時から大学院生の今まで参加してきた中で、一番規模が大きいものでした。1 日目のセッションでは会場にあふれんばかりの人が参加し、2 日目のラウンドテーブルの本番でも多くの方が集い、そこで様々な実践が報告され、学びが広がっていく様子を目の当たりにしました。

2 日目、私のテーブルにいらっしゃったある中学校の先生は、初めてのラウンドテーブルで、行政職員の方のまちづくりのあゆみと私の実践報告の 2 つの報告を聴き、分野は全く違うのですが、何か通じるところを感じられたようでした。その場では、感情が高ぶっていて言葉としてうまく表現できない様子でしたが、充実した表情からは、何かしらの価値を感じていらっしゃるように見えました。私は、ラウンドテーブルに関わる中で、そのような場面に幾度も出会い、また私自身もそのような経験をしてきました。

また私は、ラウンドテーブルに聴き手として参加するだけではなく、報告者として、さらに運営にも携わるようになりました。そういった経緯と私が修士論文で検討したのがラウンドテーブルということがあり、今回、ラウンドテーブルのあゆみについて書かせていただくことになりました。けれども、ラウンドテーブルのあゆみすべてを書くことは私には難しいので、私自身のあゆみを軸にしたラウンドテーブルの 5 年間で簡単に振り返っていきたいと思います。

聴き手と報告者の経験を重ねることでの様々な学び

初めて参加した大学 2 年（2004 年）の 7 月のラウンドテーブルは、所属する生涯学習コースの授業の一環で聴き手としての参加でした。この頃の参加者は、今ほど教員の方は多くはなく、公民館主事、行政職員、福祉施設の職員、保育士の方などが中心に参加されていました。私は参加してみて、「今日初めて出会ったのに、まったく異なる分野の集まりなのに共通するところがあり、こんなに話が盛り上がるなんて」という印象を持ちました。それは、今回のラウンドテーブルで私と同じテーブルだった先生の実践と似ているのかもしれませんが。

この次の 3 月のラウンドで初めて報告者として実践を紹介するようになりました。こうして聴き手や報告者として参加することを数年重ねていきました。毎回のラウンドテーブルが終わると、同じコースの学生同士で研究室に集まり、今回のラウンドテーブルはどうだったかを紹介し合いました。「私のテーブルではこういう人が報告されて・・・、こういう共通した話題が出て・・・」という話を日が落ちるまでしていたことを覚えています。

ラウンドテーブルとその後の仲間との話し合いを通して、ラウンドテーブルが記録をもとに長期的な実践を省察し報告する場になっていることの価値や、記録をもとに改めて言葉として語ってみることを通して自分自身の気づきが生まれたり、わかっていなかったことがみえてきたりする経験、そしてそこで記録のスタイルや聴き手の重要性に気付いていたり様々なことを学んだと実感しています。

学び合う場のデザイン

報告者としてデビューした 2005 年 3 月のラウンドテーブルでは、私が 1 年間活動を重ねてきた子どもたちとのキャンプ活動（探求ネットワーク）について、子どもの学びや自分自身の変化を中心に紹介しました。この最初の報告で使った記録には、「(子どもたちの) 仲間づくり、ブロック（活動）づくりをどのようにコーディネートするかが求められている」1) とあります。子どもたちの話し合いをどうしたらうまく進められるか悶々と悩んでいた私は、授業で『コミュニティ・オブ・プラクティス』2) を自分の活動と重ねながら読み、コーディネーターの重要性を感じました。しかし、コーディネーターの役割はわかって、具体的にどうしていったらいいのか、どのように力量を培っていけばいいのかはわかっていませんでした。

そうした中、コーディネーターとして実践していくきっかけをくれたのがラウンドテーブルでした。当時、ラウンドテーブルは 4 人の教員が中心に行われていましたが、ほとんどの裏方を担当していたのは、ある一人の方でした。私は、ラウンドテーブルに参加するようになり、その運営者が助言教員だったこともあり、自然な流れで会場のセッティングなどの仕事を手伝うようになりました。ラウンドテーブルでの会場セッティングを通して、人は場の環境に大きく規制されていることがわかりました。その時に合った場をデザインすることで、活動は大きく変化します。そして、自分の探求ネットワークの実践を振り返ってみたときに、学生スタッフが子どもたちの学ぶ環境を創っていると気付きました。学生が子どもたちの学びの場をデザインする必要性と学生同士の学ぶ場も調整していく必要性を感じました。

ラウンドテーブルと探求ネットワークやコースの実習などとリンクさせて考えたのは場のデザインだけでなく、記録や省察のサイクル、長期的な実践のデザインなど様々です。このラウンドテーブルや探求ネットワークがデザインされたものであるとわかるようになるのも後々のことでした。

学生と教員が協働したラウンドテーブルの運営

ラウンドテーブルの重要性を感じながら、私はラウンドテーブルの運営に参加していきます。2005 年くらいから、私の所属していた生涯学習コースで社会教育を学ぶ学生数人と教員が中心になり、運営を始めました。このメンバーは、先ほど紹介したラウンドの後に語り合ったメンバーが中心でした。特に、私と同じ学年で共に探求ネットワークでも活動して

いた O と教員、私の 3 人が中心となりました。O と私は、やがて実践の報告はせず、ラウンドテーブルの裏側で動くようになりました。それは、受付や印刷、弁当の配達、今の News letter のような通信『life as learning』の発行、など様々でした。こうした仕事をしていると、ただの要員としてしか見られないこともあります。私たちはラウンドテーブルに参加することでラウンドの意味を実感していたので、運営は必要なことだと理解していました。また、コーディネーターの役割を学ぶ上でも重要であるし、何より教員も私たちもフラットな関係で協働してラウンドテーブルを運営することができたのでこの仕事に意味と価値を持つことができました。

ラウンドテーブルの規模の拡大

ラウンドテーブルの運営に深く関わるようになったのは、ラウンドテーブルの規模が大きくなってきたこととも関係していると思います。私が参加していた当時、1 日目のセッションは、1 つの講義室で事足りるときもありました。それが、学校外のホールを貸し切って行うようになり 100 人を超える参加者が集うようになり、大学に会場が新設されてからは大学を拠点になり、今回は 150 人を超える参加があったようです。ラウンドテーブルも、講義室（当時の教育 1 号館 11 講義室など）を 3 部屋にテーブルが 4～6 つで足りたのが、4 部屋使うようになり、現在では、大きなフロアをいくつも使うようになりました。

また、参加者だけでなく、運営側も大きな変化がありました。少数で運営していた当時は、1 週間前から準備を始めて、「今年は準備早いねえ」と話すくらいでした。ほとんどは前日から準備を始める段階でした。お弁当の注文も 前日だった時も多々ありました。周りからみれば綱渡り状態ですが、ラウンドテーブルの中身の充実を目を向けた時、学生スタッフしかいない中で、その優先順位は正しかったのだと思います。

今回のラウンドテーブルの裏では、教員、学生、事務の方など様々なスタッフが役割を分担しながら動いていました。3 人で運営していた時が嘘のようで、本当に多くの方が働いており専門職大学院のスタッフが増え、闊達なコアやアクティブグループが形成されてきていると感じました。今後の展開がとても楽しみです。

最後に

簡単ですが、私のあゆみと共にラウンドテーブルの展開を追ってきました。ラウンドテーブルは、実践を省察する場であると同時に、私にとってはコーディネーターとしての力量を培う場となっていたと思います。そして、改めてラウンドテーブルについて考えてみると、専門職大学院のカリキュラムにラウンドテーブルが位置付いていることからわかるように、場のデザインを超えて、年間の実践のサイクルのデザインがされていることに気がきます。

現在、ラウンドテーブルは福井で展開するだけでなく様々な地で展開され始めています。しかし形式だけ真似ても、複雑な実践を丁寧に記録にしそれを語る文化ができ、そして実践の価値に焦点を当てる聴き手が存在するようにならないと、現在の福井での展開にはならないと思います。私も自分がこれから拠点とするところで、こういった場を実現してい

きたいとひそかに考えています。長い時間展望の中で、ゆっくりと様々な展開をつなぎながら段階を踏んで実現させていきたいと考えています。福井での展開から学びながら、さらなる展開を重ねていきたいです。

1) 『福井大学教育地域科学部総合学習研究探求ネットワーク

2004 活動報告書 わくわくキャンプ工房ブロック活動報告書』福井大学教育地域科学部社会教育研究室, 2005

2) エティエンヌ・ウェンガー, リチャード・マクダーモット, ウィリアム・M・スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティ』翔泳社, 2002.

(E.Wenger,R.Mcdermott&W.M.Snyder,Cultivating Communities of Practice,Harvard Business School Press,2002.)

「協働」に実践の裏付けを

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース／あわら市金津中学校教諭 荒川 誠

3月1日に「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009」が、県内外から多数の参加者を得て、盛大に開催された。共用講義棟の5会場で32グループに分かれて、それぞれ3つの教育実践の展開をじっくり聞き合うこととなった。

私が所属した第2グループは、(実践の語り手は,)伊那小学校の掛川先生,私,大学院生(福井大学教職大学院教職専門性開発コース1年生)の鈴木さんであり、この順に、この1年間の実践の歩みを熱く語り合った。聞き手としては、県外から長崎大学の呉屋先生,埼玉県新座高校の金子先生,大学院生(京都大学)の本所さんと、県内からは至民中学校の山内先生が参加された。呉屋先生や金子先生、そして掛川先生は、「教員研修と協働」や「子どもの学び」,

「総合学習と探究」といった分野では造詣が深く、展開が語られる場面では、子どもたちの学びの事実や指導者の深い思いが的確に指摘された。また本所さんは語りの中で感じた指導者の心理を、山内先生は勤務校と対比して感じた課題を、それぞれ語っていたように思う。このように多方面で活躍されている研究者や教師が一同に集い、それぞれの実践の過程を共有し、子どもや指導者、組織が成長していくプロセスをじっくり探っていく協働研究の場ができあがっていた。

ここでは福井大学院生の鈴木さんに焦点をあて、私自身の視点から、彼がどのような事実を聞き取り何を学んでいったのかを中心に、ラウンドテーブルという協働体(コミュニティ)が、どのように展開していったのかを振り返りたい。

『『くるみゆべし(餅)』を作ろう』では、工夫して作った餅を、祖父母参観日に来校した方に食べてもらおうと張りきっていた。しかし、時間が経つと硬くなってしまいう問題にぶつかり、「お店のお菓子が硬くならないのはなぜか?」、「洋菓子屋さんに聞いてみる」などの意見をもとに、学びが発展していった。

改良したものを、「プロに食べてもらいたい」と自信満々に和菓子屋に持ち込んだところ、「こし(粘り気)が足りない」と言われ、更にそこから次の追究が始まった。

(鈴木さん)

私も小学校の生活科で、「水の中の生き物:金魚」について学ぶ活動を見てきた。授業担当の先生は「金魚を調べたい」という子どもの希望を大事にして教材にした。しかし、参観している中で私は、水槽の中で黙々と泳ぐだけの金魚の姿に、子どもの意欲が徐々に薄れてきていると感じた。なぜくるみ学習は、子どもの活動が次から次へと広がっていったのだろうか。

(掛川先生)

最初は、私も不安だったので、学年会の仲間と教材研究を徹底的にした。校長にも相談して、アドバイスをいただいた。

(呉屋先生)

「なぜ学ぶのか？」という必然性が大事なんだろう。小学校では、教科は違ってても指導者は一緒だから、教材をつなげることも可能だろう。たとえば「くるみのリースづくり」では、くるみの数を数えることが算数の勉強とつながっていた。

(山内先生)

地域住民とふれあう活動が意欲につながっているのではない。

(金子先生)

くるみを教材化していく場が大事。教材研究することで、若い教師と先輩教師のつながりや、教材と地域のつながりが構築される。「くるみ学習」が偶然に発展したのではなく、それを発展させるバックグラウンドがある。

(鈴木さん)

そのようなつながりが、子どもたちの学びの新しい展開を生み出していたのですね。

「金魚」(を学習すること)に飽きてしまうという疑問を探っていた鈴木さんが、「くるみ学習」を生き生きと発展していく子どもたちの活動を追う中で、探究活動を教材を支える指導者たちや、学校と地域の協働の姿に気づいた。鈴木さんは、「金魚」の指導にあたって学年部会や前年度の実践者と話し合ったことを振り返りながら、教材の発展性を追求するためには、協働することが必要性だということを学んでいったと感じた。

午後からは、私が「学び合う学校文化の創造」というタイトルで、探究学習と生徒指導についてのカンファレンスを校内研究として立ち上げた経緯を、時系列に沿って具体的な展開を報告した。教材研究で予想していた子どもの反応と実際とのズレを経験して挫折を味わい、自分自身の教材研究のあり方について再考したことを踏まえ、子どもの学びを実現する授業に必要な要素について仮説的に提起した。

(呉屋先生)

教材研究をしても授業のねらいは、モチベーションの高い子には伝わるが、低い子には伝わらないというデータがある。授業で子どもの学びを実現するには、指導者の

熱い語り(思い)以上の何かが必要だ。

(掛川先生)

子ども同士の話は伝わっても、指導者の話が伝わらないことがよくある。

(金子先生)

「コの字型スタイル」で授業を始めてしばらくたった頃、ある子の発言を別の子がフォローした場面があった。学習課題を生徒同士が共有しはじめたのだ。子ども同士が安心して学ぶには、「なぜ？」と発言できる空間の創造が必要である。

(鈴木さん)

中学校時代を振り返ると、ある友達が真面目な顔をしてひっかる(違った答えを言う)ことから、授業が盛り上がっていった。

「金魚学習」でも、子どもたちがつまづくような場面があると良かったのかも。

(掛川先生)

授業に失敗(間違った発言など)ということはない。失敗でなく、あたらしい課題へのステップととらえる。

(本所さん)

電熱線の授業の様子から、「子どもがつまづきながら解決していく姿」に気づき、それを喜びとしている教師が見える。

(鈴木さん)

生徒たちが、抵抗学習に疑問を持ち、自由な発想で解決している。(つまづくことが)楽しそう。

私の報告を受けて、子どもたちの意欲的な学びには、分からないことを安心して発信したり、それを肯定的に受け止める仲間や教師の存在が必要であることに話題が展開していった。

この第2グループには、優れた実践者や研究者が集まっていたため、はじめは遠慮がちに話していた鈴木さんであったが、午後からは、「うまく言えないが…」と前置きしながらも、自信を持って自分の意見を語り始めていた。学び合う(協働の)基盤と共感的な人間関係の重要性を、鈴木さん自身が身をもって実感していたのではないかとと思われる。

最後に鈴木さんから、ストレートマスターとして取り組んできたことを「小学校の読書指導の授業で、寝ころびながら読書をするを許可するかどうか戸惑ったこと」を中心に報告があった。それに加えて、「小学校のクラブ指導中に、『講師のくせに』と言われたこと」といったエピソードを通して、教職大学院のインターンとしての悩みも語られた。

(金子先生)

なぜ子どもに絵本を読ませたかったのか？鈴木さんが何かを伝えようとしている姿が見える。

(鈴木さん)

昔は、読書が嫌いだった。しかし、園児と絵本の話をしている間に、絵本を読んであげたくなった。

(呉屋先生)

園児が本を読む姿を見て、鈴木先生が変わっていった。園児が本を好きになることも大事な議論だが、絵本を読んでいる園児の姿が好きになっている鈴木さんの姿がおもしろい。

(本所さん)

寝ころばせながら読ませたことを悩んでいるようだが、園児たちが、寝ころびながら楽しそうに読んでいる雰囲気が好きだからではないか。それは「よし」としてもいいのでは。

(荒川)

金魚の教材を考えても、子どもに関心があるから教材にするのでなく、指導者がこの教材を使って、何かを伝えたいという熱い思いが大事。掛川先生が「くるみ」が好きでなかったら、うまくいかなかったのかもしれない。クラブ活動での鈴木さんの指導の様子を聞いていて、鈴木さんのかかわりが弱かった感じがする。

それを見抜いているから、鈴木さんの指導に反抗して「講師のくせに」と言ったのではないか。

(鈴木さん)

小学校と幼稚園のつながりについて勉強したいので、両方の学校に関わってきた。しかし根本は、幼稚園児の素直な行動が好きである。来年は幼稚園に絞って、子ども中心の活動を実践してみたい。

鈴木さんは、今年初めて指導者として園児や児童に関わってきた。そこでは、子どもとの（位置）関

係に不安を抱えていたことが分かる。実際に記録を語るときにも、迷っている顔色が伺えた。

しかし、参加者からは、「鈴木さんが ” 絵本を読ませたい ” という思いを抱いたときに、教育者としてのモードに入ったのではないか。」「子ども同士のいろいろな関係に気を配っている。教師として大事な視点が身についている。」など、鈴木さんが教師として成長している姿がいくつも指摘された。最後に、「これからは、もっと積極的に子どもに関わってみたい。」という話しに、参加者全員から惜しみない拍手が送られた。

朝9時過ぎから始まったラウンドテーブルは、15時近くまであっという間に時間が過ぎてしまったように感じた。

「語り手」と「聞き手」という役割分担はあったものの、結局は、参加者全員が自分の経験を振り返りながら感じたことを伝え合い、また相手から「新しい見方・考え方」を受け取っていた。

「省察とは、既存の知識や経験を解体し、再びつなぎ合わせる創造的な活動である。」これは、ラウンドテーブルを通じて私が感じたことである。地域・職業・立場を越えた大人同士が、じっくりと地道に学び合う時間の積み上げこそが、参加者一人ひとりを成長させ、また次世代の活力の創造となることを実感した。

展開を語る意味

福井大学教職大学院教職専門性開発コース 1 年／附属中学校インターン 藤川 洋平

今回のラウンドテーブルでは、早稲田大学大学院生の宮河先生、福井大学大学院生の井上先生、東京学芸大学の熊先生、福井大学の石井パークマン先生、東京学芸大学院生の熊木先生、栃木市教育委員会の岩瀬先生、筆者の合計7人がテーブルを囲んだ。私を含めて3人（宮河先生、井上先生、筆者）の報告があり、それぞれの実践をもとに小グループで語り合っていた。私は1年間の長期インターンシップを通して、自分自身がどのようなことを感じてきたか、どう変化していったかなど、自身の成長過程を振り返った報告を行った。

その中でも、私はある一場面が大変印象に残っている。一年間のインターンシップでは多くの授業参観を行い、生徒が学ぶ姿や授業の進め方、自分の目指す授業の形など様々なことを考えることができた

と報告を行った。それに対して、ある先生から「稲垣忠彦先生の講演で『*Reflection For Action*』、『*Reflection In Action*』、『*Reflection After Action*』の3つの『*Reflection*』について話が合ったよね。教員生活では、授業を行う際に授業中にチョークを持ちながらも『自分の目指す授業はこれでいいのか?』と自問自答し、常に自らの授業を高めていくこと、つまり『*Reflection In Action*』が必要になるんだよ。藤川くんが一年間行ってきたことは『*Reflection In Action*』を行う上で非常に重要なことなんだ。インターンシップの授業参観では自らの授業を第三者の視点で評価する力をつけているんだよ。』とお言葉をいただいた。私は授業参観の際にそのような視点を持っていなかった。しかし、実践を語ることで自分とは違った視点から実践についての意見をいただき、

それが新たな学びとなり次の実践の糧になっていく。ここでは語り合うことで自らの学びが広がっていくうれしさを感じた。

それぞれの経験をもとに報告者の実践について語り合う。日々の授業や生徒との関わりについて振り返り語り合う中で、自分自身も変わっていく。ラウンドテーブルはまさに稲垣先生のおっしゃっていた『*Reflection After Action*』なのだと感じる事ができた。

また、場所は違えど、同じ教職大学院生という立場で教育に本気で取り組んでいる先生方がいるということを確認できたことも大きな収穫だった。実践を行っている自分の場所を見失うことがあるが、今回のラウンドテーブルは、自分のやってきたこと、これからやろうとしていることを確認することができた非常に貴重な機会だったと感じる。

「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009」に参加して

東京大学大学院教育学専攻科博士後期課程 北田 佳子

「研究 (research)」という言葉に代表されるように、学びにとって重要な行為の多くには“re - ”という接頭辞が付いている。長年、事例研究を中心とする教師教育を実践してきた教育心理学者のリー・ショーマンも、経験が「再度想起され (re-collected)、再度語られ (re-told)、再度経験し直され (re-experienced)、省察 (re-flected) される」ことから、我々は学ぶと述べている (Shulman, 2004, p. 474)。

2 日目の「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009」は、まさにこの学びにとって重要な一連の行為が、参加者一人ひとりによって丁寧に行われている場であった。以下では、そのプロセスを私なりにたどり直してみたい。

私のグループには、まず報告者である鳥井新平先生 (近江兄弟社小学校)、笠川誠二先生 (福井大学教職員大学院スクールリーダー)、濱野文代先生 (福井大学大学院教育学研究科) に加え、奥村栄司郎先生 (福井大学教育地域科学部附属中学校)、衣袋健一先生 (東京学芸大学大学院) という方々が集っていた。

一人目の報告者である鳥井先生は、とてもユニークな形でご自身の実践について語って下さった。まず、おもむろにスケッチブック風の大きなノートを取り出し「では始めさせていただきます」と最初のページを開いてくれたのだが、なんとそれは実践の軌跡を綴った鳥井先生手作りのストーリー・ブックになっていた。タイトルは『学校をひらいて つなげるー親子プログラムと地域交流の試み』。そこには、鳥井先生が、保護者や地域の方々、あるいは環境デザイナーといったさまざまな分野の専門家たちと連携を取りながら、実践したプログラムの詳細が、絵や写真や文字を使って鮮やかに描かれていた。ペー

ジが進むごとに、次はどうなるのだろうと、まるで絵本に夢中になる子どものように、私はその物語に引き込まれていった。

研究報告や実践報告という、そのほとんどは文字情報によるものである。絵や写真といった媒体が使われることはあっても、それは補足的な情報に過ぎない場合が多い。

それに対して、鳥井先生の報告は、絵や写真が中心となって構成されており、おそらく文字のみでは伝えきれなかっただろう鳥井先生の実践に込められた思いや、子どもたちの姿や、実践の舞台となった土地の様子が豊かに描かれていた。さらに印象深かったのは、鳥井先生が、この実践をいわゆる典型的な論文形式にまとめたものも、同時に配って下さったことである。自身の実践を多様な表現方法で語ることで鳥井先生の力量に、感服せずにはいられなかった。

二人目の報告者は、笠川先生で、「通常学級における特別支援教育の実践と省察」について語って下さった。笠川先生の報告も、非常に興味深いものだった。以前、受け持った子どもたちの中に、もしかするとアスペルガー症候群ではないかと疑われるような行動を見せる子どもがおり、教師として、場あたりの指導ではなく、適切な知識に基づいた支援ができるようになりたいと強く思ったことが、探究のきっかけになったという。「その子さえいなければ」ではなく、「その子がいてくれたからこそ」教師として成長できた、という笠川先生の言葉は忘れることができない。

また、笠川先生の論文の記述方法からも学ぶところが多かった。以前の笠川先生は、要点を列挙した

り表にまとめたりといった記述の仕方を好んでいた。しかし、福井大学の附属小学校や、伊那小学校の紀要を読んだ際、実践の物語を丁寧な綴るナラティブな記述方法に出会い、徐々にその魅力に引きつけられるようになったという。興味深いのは、笠川先生がご自身の論文を執筆する際、中盤までをかつて好んでいた記述スタイルで書き、後半でナラティブな記述に挑戦していた点である。論文の記述スタイルの変容が、そのまま笠川先生自身の変化の軌跡を反映しているのである。通常、論文には一貫した記述スタイルが求められる。しかし、笠川先生があえてこのような挑戦をされ、自身の実践を語るより良い方法を模索している姿から、私は多くのことを学ぶことができた。

三人目の報告者は、濱野先生だった。「精神障害者の社会復帰を阻む要因についての考察」というテーマで報告して下さった。濱野先生の語りの中には、心に留めておきたい言葉がいくつも存在した。とりわけ印象深かったのは、精神疾患を有する人々の抱える問題を、濱野先生が「決して明日は他人ごとではない問題」と捉えていたことである。さらに濱野先生は、今回の研究の中で、改めて調査の対象となった人たちの苦しい現状を目の当たりにし、自分自身も本当につらい思いをしたと告白している。濱野先生は、それを調査者としての「未熟さ」や「甘さ」として反省されているが、私はむしろ、そのような痛みの伴わないところに、教育の探求は成立しないと考えている。濱野先生は、ご自身が痛みを感じているからこそ、相手の声に傾聴し、心を砕き、応答することができたのだと思う。

また、濱野先生の研究は、質問紙調査の緻密な分析を、量・質の両面で行った非常に説得力のあるものであった。濱野先生は、今回の研究結果について、同僚には「もう知っているあたり前のことって言われるんじゃないかな」と笑っておられた。しかし、実践の中で実感していることを、改めて研究の言語で捉え直すことは重要な作業である。特に、濱野先生が探究しておられるテーマは、地域や行政といったより広い文脈の読み手に訴えかけるものでなければならない。その意味で、今回のご報告は、その内容面でも研究方法の面でも、力強く訴えかけてくるものであった。

この3つの報告は、一見するとつながりの薄いテーマに見えるかもしれない。しかし、私たちは、語れば語るほど、それぞれが密接に関連しあっていることを実感せずにはいられなかった。さらに、それは聞き役であった奥村先生や衣袋先生や私の課題とも深く関わっており、それぞれの置かれている文脈と関連付けながら、一人ひとりの経験が

「再度想起され、再度語られ、再度経験し直され、省察される」思いであった。「re-」という接頭辞には、「再度」という意味に加え、「新たに」という意味もあるという。確かに、このラウンドテーブルでの経験を通して、私たちはこれまでの実践を振り返るだけではなく、一人ひとりにとっての新たな「研究(research)」の方向性もまた、見えてきたように思う。

〈引用文献〉Shulman, Lee S. (2004). *The Wisdom of Practice: Essays on Teaching, Learning, and Learning to Teach*. San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers

同一グループにおける経験を複数の参加者が語る

第29グループの話し合いを、参加者の中の4人の方に報告していただいた。

長野県伊那市立伊那小学校教諭

森田 正之

初めて参加させていただきました。勉強不足でなんの予備知識もないままに出かけていきましたので、教職員大学という存在も先進的な改革をされている至民中学校という存在も、このときに初めて知りました。至民中学校の大橋巖先生の報告では、学校現場と大学の研究とが密接につながり、地域ともつながり、協力しあって学校づくりを進めていかれている様子をうかがい、とても興味深くお聞きすることができました。「通いたい、通わせたい、勤めたい学校」という実にシンプルで、しかし本質的な学校像

を目指して、さまざまな分野の人たちと協力し次々に手をうたれていく組織としての実行力とその推進を担われている大橋先生をはじめとした至民中学校の先生方の実践力には、大きな驚きを感じ敬服いたしました。

私の拙い実践報告にも真剣に耳を傾けていただけたこと、ありがたく思いました。私のテーブルには現場の先生も大学の先生もいらっしゃいました。どの先生からも実践の内容をつつくようなことなく、この実践を通して教師としての私自身の育ちや

学びをどう感じているのかとか、そうして得たものをこれからどう活かしていくのかとか、これまでほとんど人から問われることも自分自身で問うこともなかったことを問われ、なごやかで楽しいテーブルの雰囲気の中ではありましたが、学校現場の実践者

として大切にしなければいけないことを気づかせていただいたように感じ、とても意義ある時間となりました。

お茶の水女子大学大学院人間発達科学専攻 2 年

吉見 江利

2 日目、小グループに分かれてのラウンドテーブルは、地域や専門は異なるが自分以外は全て現職の小中学校の教諭及び大学教員の方々の中で行われた。

1 人目の長野県伊那小 1 年担任の森田先生は伝統ある総合学習の実践の様子を話された。都会の小学校 1 年生では「無理」「危険」と回避するような小屋作りやヤギの世話や散歩などを子どもたちが率先して行う姿に驚いた。またヤギを中心に「仲間」や「社会のしくみ」「豊かな感性」が自然にお互いの中から育っていると感じた。発表は、記録が書かれた模造紙を床に広げての説明で、臨場感がありとてもわかりやすかった。ただ部屋を移ったために、質問が固定式のテーブルで行われ、全員が一同に向き合えず、発表者と質問者のやりとりを全員で共有しにくかったことが心残りであった。

午後、2 人目は福井大学教職大学院の拠点校である至民中学校で実践と研究をされている大橋先生の発表で、移転開校によりクラスターという異学年で構成された教科別教室の形や 1 時限を 70 分にするという画期的な方法により学校の授業を根本から変革していた。それは従来の学校のイメージを覆えす、目からウロコの話であった。デザイン性の高い校舎

の中で生徒も先生も活き活きと学校生活を送り、地域の人もガイドボランティアで「私たちの学校」と誇りを持って積極的に関わっている様子が目に浮かんだ。

3 人目は福井大学教職大学院 1 年目の福井県内養護学校教諭の山崎先生の発表であった。専門的な実践の中、生徒同士の好ましい関係が広がりクラス全体のかかわりに変容があったということが活き活きと語られた。実践の中で気づいたことを同僚の先生方と省察をしながら深めており、そこには同僚の先生方は経験年数では上であっても「～してはいけない」「～すればよい」「～すべき」のような一方的な助言や指導はない。共に実践を共感し、創造する仲間としての存在であることがとても大きいように感じた。

私自身、地域で学校支援ボランティア活動に関わっており、学校や先生との壁に悩んでいたが、先生方の苦労を含めた実践をお聞きし「学校もこんなに変わる」「こんなに熱意をもった素敵な先生方がいる」と大変勇気づけられた。教員ではなくても明日から自分もまた、地域と学校のために頑張ろうという気持ちになれたことがとても嬉しかった。

福井大学教職大学院教職専門性開発コース 1 年/県立嶺北養護学校講師 山崎 祥子

私がラウンドテーブルに参加したのは、今回で 3 回目です。毎回規模が大きくなっているように感じます。このように大規模なラウンドテーブルで、各方面の経験豊かな方々が参加されている中で、今回私が報告をさせていただくことに始めは抵抗を感じました。しかしこれをチャンスと思い、勉強させていただこうと決意できたのも、これまでのラウンドテーブルの経験から、小規模グループでの話し合いがいつも充実しており、自分にとって新たな発見の連続であることを知っていたからではないかと思っています。

まず報告 1 の伊那小学校の実践について考えたことを記したいと思います。これまで伊那小学校の実践を読んだり、講義形式でお話を聞いたりしたこと

はありましたが、今回、このように少人数の場でじっくりと聞けたことをまず嬉しく思いました。きれいな面ばかりでないリアルな実践を聞くことができ、身近に感じられました。印象に残った言葉は「小学校 1 年生だからこんなもんだろう、という自分の中の枠を取り払い、子どものいろんな力を引き出してあげたい」という言葉でした。何気ない一言で、そう思っている先生も多いことと思いますが、そのときまさに聞きしていた実践の中でその思いが生き生きと感じられ、それをダイナミックに実践されている先生の言葉であったからこそ、とても迫力のある言葉に感じました。いつも私の頭にもあることでしたが、できたりできなかったり…。学校種を越えて改めて子どもの可能性を信じる大切さを教えて

いただきました。

そして私の実践の報告。つたない報告で申し訳ない気分になりましたが、それでも温かくご意見をくださり、とても勉強になりました。専門が似ている先生から、全く違う先生までいらっしやり、それぞれのお立場から思ったことを話してくださいました。時には私が答えきれない部分を補っていただくこともあり、その点でもとても勉強になりました。この実践を通して自分のどこがどう変わったか、自分と同僚との関係はどのようなものか、など、今のまま

では不十分で、もっと突き詰めて考えるべき課題をいただきました。これまでの実践を振り返りまとめるとき、また、これからの実践をまとめていくときに、改めてしっかりと考えていきたいと思いました。

今回のラウンドテーブルを通して感じたことがまた、一つのステップになります。本当にありがとうございました。

—展開を支える営みを聞きとるとは—

東京学芸大学教職大学院院長 小林 正幸

実践記録を元に実践の歩みをじっくり語り、それを聴くことが、本ラウンドテーブルでは目指すことでした。発表者は3人。午前中の報告1は、長野県の伊奈小学校の森田正之先生、報告2は、福井大学教職大学院の現職教員で至民中学校の大橋巖先生、福井大学教職大学院の山崎祥子さんと、特別支援学校での実践事例報告でした。

実践をより広く伝え合い、じっくり展開を聞きとり、学び合う場として、前提を共有していない人と、少人数で親密に語るの構造から作られる意味と、その意義は堪能できたように思います。いろいろ考えさせられ、あれこれせわしく頭が動きました。それは面白い体験でした。それが「その後の実践への問いの深まり」を生み出すようにも感じました。ただ一つだけ気になったことがあります。

それは、1時間30分の時間の持ち方です。じっくり語り、それを聴くとは、1時間30分のセッションで、1時間近くを報告者の報告を聞くことなのだろうかとの印象を抱きました。

私自身はカウンセリングを専門としています。クライアントに省察させる中で変化を与えるのが仕事です。そのときに傾聴を強調します普段から、そこでの傾聴は、「ただ、ふんふんと聞くのは、聞くのではない」と考えています。それでは、互いに変化は起きないし、本当に聴いてもらった感覚は、話し手に起きないからです。

事象と出会ったときに感じた違和感や感動などを、聴き手が踏み込んで確認し、表明し、的確に話せること、そこで、その場での話を深化させることが、聴くことであり、他者の学びを学ぶ者としての役割なのではないかと思います。

あくまでも報告者の報告から離れてはなりません。報告を受けて、語り合いことが、残されてしまったように思われました。対話のように報告をすること、そこでより深めたいことが、報告者の中で、焦点化されて端的に示さる必要もあるのでしょうか。参加者は、そこで生じる疑問や違和感をできるだけ端的に語れるようにする必要もあるように思いました。

対話のためのラウンドテーブルです。報告者報告は時間の半分、できれば、全体時間の3分1で一番大事なところ、どうしてもそれを語るために必要なことを語っていただき、後半の半分あるいは3分の2の時間は、それを深め、対話することにしていただきたいと感じました。じっくり話すのを大事にするのでしょうか。じっくり聞くことを大事にするのでしょうか。福井大学のラウンドテーブルの構造、趣旨に賛同し、意義を理解し、それを堪能し、内容は素晴らしいかと思っています。

ただ一点だけ「もったいないな」と感じたことを書かせていただきました。失礼をお許しくださいます。

※ご所属は当時のものです。

国際展開

—アフリカ・ラウンドテーブルの報告—

A Reflection on the Experiences in Africa (Malawi) Roundtable 2019

アフリカ（マラウイ）ラウンドテーブル 2019 の経験のふり返し

カトト中等高校 Christopher Nyasulu

（＊日本語訳は英語文の後にあります。）

From 12th to 13th December 2019 several schools in the Central and Northern educational regions converged at Loyola Jesuit Secondary School for a workshop on Lesson Study and Round table activities in Malawi. The workshop was under the banner “*The Role and Contribution of the School to the Current Global Environmental Challenges- a Case of Loyola Jesuit Secondary School Environmental Research Corner.*”

The principal of the school outlined the vision and goals of his school which among other things focus on reflection in order to forge ahead. The same sentiment of reflection was echoed in the students’ presentation of “Examen”, which is literally a prayer of reflection observed by all learners at a specific set period in a day.

University of Fukui team outlined the tenets of reflective lesson study model of learning. Among other things the presenters, Prof. Kosaka, Prof. Pauline and Prof Mitamura, emphasized that lesson study encourages learners to generate their own knowledge and the teacher’s role is that of a “coach”. It was also impressed on the participants that education is interdisciplinary and that learners should be able to apply knowledge across the curriculum. This was deliberately emphasized to dispel misconceptions that lesson study is more appropriate for science subjects only.

Participants later broke into various small round table groups where they introduced themselves to each other and shared experiences in



respective schools. They concentrated on best practices or innovative practices carried out in their schools including lesson study and some sort of projects or research activities.

The 2017 JICA KCCP Malawi-Fukui participants, Mr. Moyo from Nalikule, Mr. Ganizani from Loyola and myself made presentations on the formation of Communities of Practice. They also presented tangible examples of schools where CoP are active. Katoto Secondary School displayed how school’s vision and mission statement can enhance collaboration in schools which leads to openness. In fact, collaboration and openness are prerequisites to effective learning practices. Loyola Secondary School students-Loyola Jesuit Secondary School Environmental Research Corner- underscored that once learners are given autonomy to explore and co-create knowledge, they can positively impact their colleagues and the communities around them.

Day two of the workshop took participants to a practical observation of a Reflective Lesson Study class. They actually observed the learning process with emphasis on whether learners were able to generate knowledge by thinking through the concepts in the broad topic of Space, Shape and

Measurement which was narrowed down to chord properties of a circle for that day's lesson. One thing that really stuck in the participants during the post lesson discussion was that learners should not be limited to specific ways of solving mathematical problems. Let them explore as many ways as possible as long they use the knowledge acquired during previous lessons or previous topics or indeed from other disciplines. Certainly, this is what reflection, co-inquiry and co-creation of knowledge



【日本語訳】

2019年12月12日・13日に、中央・北部教育地域のいくつかの学校が、ロヨラ・ジェズイット中学校に、マラウィでの授業研究とラウンドテーブルのワークショップのために集まりました。ワークショップは、「今日のグローバルな環境での挑戦のための学校の役割と貢献—ロヨラ・ジェズイット中学校・環境リサーチ・コーナーの事例」という題でした。

学校長が、いくつもの事柄の中でも、特に推し進めていくために省察に焦点を当てている自身の学校のヴィジョンとゴールの概要を述べました。省察に関する同様の考えは、生徒たちの（キリスト教の）「魂の吟味」の発表の中にもそのまま繰り返されています。この「魂の吟味」というのは、この言葉通り、一日のなかの特別な時間に、全ての生徒たちによって守られている反省（reflection）の祈りのことです。

福井大学チームは、学習の省察的授業研究モデルの考えの概要を話しました。発表者である、高阪先生、ポーリン先生、三田村先生は、授業研究は、生徒が自身の知を生み出すよう励ますこと、教員の役割は「コーチ」であることを強調しました。また、教育は学際的であること、生徒はカリキュラムを横断して知を身につけられるべきであるということもまた、参加者たちに印象付けました。これは、明らかに、授業研究が理系科目にだけふさわしいという誤解を解くための強調でした。

entails among other things.

Finally, there was a roundtable conference where participants from home groups shared the experiences to all and sundry. Experiences ranged from the impact of Lesson Study, Students Projects/Research to some policies that hamper the progress of some effective teaching/learning practices. One implicit remark was that during Lesson Study class observation we should refrain from “critiquing” the lesson or the teacher.



その後、参加者たちは、様々な小さなラウンドテーブルのグループに分けられました。そこで、彼らは、自分自身のことを互いに紹介し、それぞれの学校での経験を共有しました。彼らは、授業研究と、何らかのプロジェクトや研究活動も含んで、学校で行われている最も良かった実践、あるいは革新的な実践に集中して話しました。

2017年のJICA KCCP 福井・マラウィの参加者である、ナリクレからのモヨ氏、ロヨラからのガニザニ氏、そして私は、実践コミュニティ（CoP）の形成について発表しました。私たちはまた、CoPが活発な学校の具体的な例を発表しました。カトト中学校は、どのようにしてスクール・ヴィジョンとミッション宣言は、開放性につながる学校における協働を高められるのかを明らかにしました。ロヨラ中学校の生徒たち（ロヨラ・ジェズイット中学校 環境リサーチ・コーナー）は、いったん学習者たちが知を探究し共同で創出する自律性が与えられると、彼らは積極的に自分たちの仲間と、自分たちのまわりのコミュニティに影響を与えられるのだということを力説しました。

ワークショップの2日目は、省察的実践研究のクラスの実践的な参観に参加者たちを連れて行きました。私たちは、実際に、その日の授業向けには円の弦に限定されていましたが、寸法、形、空間という幅広いトピックの中での諸概念を用いて思考することにより、知を生み出すことができるかどうかを強

調している学習プロセスを観察しました。その後の授業のディスカッションの間に、参加者たちのなかで、本当に印象に残ったことは、学習者たちが、数学的問題を解決する特定の方法に制限されるべきではないということでした。つまり、できる限り多くの方法で、彼らがその前の授業やその前の単元で、または別の科目から獲得した知を使って探求させることです。きっと、このことこそが、省察、共同探求、知の共同創出がなによりも必要とすることなのです。

最後に、ホーム・グループにいた参加者たちが様々な人たちに経験を共有したラウンド・テーブルがありました。共有された経験には、授業研究のインパクト、生徒たちのプロジェクト／リサーチから、効果的なティーチング／ラーニング実践の発展を妨げる方法までありました。その中に潜んでいた気づきは、授業研究の参観の間、私たちは、授業や教師を「批判すること」をやめるべきだということでした。

実践研究福井ラウンドテーブルの二十年 その2

歴史的な展望のために

福井大学連合教職大学院 柳沢昌一

実践・省察・研究の長い歴史の中でのラウンドテーブル

前半部で跡づけてきたラウンドテーブルの二十年の展開と広がり、そしてそれを支える組織の構築というより長い改革プロセスを担っていくために、わたしたちは自分たちの営みを、さらに長い、世代を継いだ歴史的な企図の脈絡の中で捉え直していくことが求められることになります。専門職と市民の実践的な力への問い、それを支える実践者としての省察・研究とそのひらかれた交流への歴史的な挑戦の積み重ねの中に、現在の営みを位置づけ直し、より長いこれからの歴史的な展望へとつないでいくことが求められてきます。これまで、福井におけるラウンドテーブルが生まれてきた、その歴史的な前提については、十分に語られてきませんでした。二十年目を迎えるに当たって、少しずつラウンドテーブルと教職大学院の企図の歴史的な背景についても明らかにしていきたいと思います。ここではそこで検討すべき重要なポイントのみを覚書として記しておきたいと思います。

実践とその記録、およびそれを協働して深めていく学習のプロセスと組織について、私たちは直接には戦後日本における社会教育実践とその記録に学ぶことができました。国立市公民館保育室運営会議を中心とする実践とその記録の組織化⁽¹⁾、長野県松川町における健康問題学習の実践とその集会活動の組織過程⁽²⁾は、福井におけるラウンドテーブルと教職大学院の学習過程とその組織の直接のモ

デルとなっています。長い実践過程を跡づける記録のあり方について、私たちは長野県伊那小学校の長期的な実践記録の叙述スタイル⁽³⁾から多くを学ぶことができました。そこから学んだことを福井における公民館、福井大学教育学部における学習過程、附属学校における共同研究とその記録に活かしつつそこの状況に即した調整・発展を繰り返しながら展開してきたことがラウンドテーブルと教職大学院の学びの在り方につながっています。

そして国立市や松川町の実践の背景には社会教育における共同学習と生活記録の取り組み⁽⁴⁾があり、それらは戦前の生活綴り方運動ともつながっています。伊那小の取り組みは直接には信州大学附属長野小学校の総合学習⁽⁵⁾、さらには大正期長野師範研究学級の企図とその記録（淀川茂重『途上』⁽⁶⁾）にその源流を求めることが出来ます。もう一つ私たちに大きな刺激を与え続けてくれている富山市立堀川小学校の実践とその記録⁽⁷⁾も合わせ考えるならば、それらが戦後の授業研究運動、さらには大正期の新教育運動の大きな広がりを歴史的な背景としていることは疑いありません。その大きな渦の中心にあった奈良女子師範附属小学校の企図⁽⁸⁾、現在の奈良女子大学附属小学校の取り組みに至る学習研究の展開を考え合わせるならば、教職大学院が奈良女子大学と連合するに至ったことの歴史的な意味も見えてきます。

大正期の新教育運動には複数の歴史的な前提がありますが、その中でも明治以来のペスタロッチ主義（開発主義）への企図、それをさらに組織化しようとするヘルバルト主義の展開、そして何よりそれらを受けて新たな学校づくりと教師の学習の組織化を進めようとするデューイらの企図⁽⁹⁾に大きな影響を受けています。学習者主体の学習への企図についてはデューイをその起源として説明される場合が多いと思いますが、教育への問いの長い展開をたどるならば、デューイの企図がアメリカにおけるヘルバルト主義に基づくカリキュラム改革運動、そしてフレーベル主義の幼稚園をめざす実践者の営みに深く関わっていることに気づくことになります。ヘルバルト、フレーベル、ペスタロッチ、そしてルソー。18世紀初頭、市民革命期の新教育への企図を、19世紀末から20世紀初頭の運動は歴史的な礎とし、そしてそれを超える展開を目指して進められていきます。

18世紀初頭の新教育運動、そして市民革命の企図と関わって最後に、カントに触れておかななくてはなりません。純粹理性批判を執筆していた時期、カントはプロイセンにおける新教育運動、汎愛学舎の企図に関わっていました。「汎愛学舎論」に当時のカントの教育改革運動の捉え方が示されています。その中でカントは新しい教育を実現し発展させていくためには、実際に企図を進め、そこで起きてくる様々な問題も含めて広く検証・研究、共有し、それらを踏まえて発展させていく営みを協働して進めていくしかないこと、あらかじめ正しい方法があるのではなく、企図（実験）とそのひらかれた検証の積み重ねによるしかないことを語り、そうした企図としての汎愛学舎への読者の協力（寄付）を訴えています⁽¹⁰⁾。「理論と実践」において語られている、実践者こそ実践における学をつくる主体であるという把握⁽¹¹⁾、「啓蒙とは何か」において明示されている、ひらかれた批判的公共圏、主体的に考える市民によるコミュニケーションこそ社会的な秩序の基盤としての法の基盤であるという洞察⁽¹²⁾。実践者自身による実践の探究とそのひらかれたコミュニケーション、そしてそれがよりひらかれた市民的公共性につながっていくというカントの構想は、それ以後の幾世代

にもわたる実践と省察、そしてそのコミュニケーションをめぐる企図を基本的な方向定位、そしてその地平をひらく歴史的な基盤として働き続けています。⁽¹³⁾

まったくの駆け足で歴史的な背景のポイントのみ記してきましたが、最後に私たちの企図を照らすもう一つの光源についても触れておかなければなりません。ドナルド・A・ショーンの *The Reflective Practitioner* をめぐる一連の研究についてです⁽¹⁴⁾。前述したように、福井大学におけるラウンドテーブルや実践記録のデザインは、直接的には日本の社会教育・学校教育の実践とその記録や研究組織から学びつつ福井における企図の積み重ねから編まれてきたものであり、その点ではショーンから学んだものではありません。しかし専門職の力量とその学びをめぐるショーンの問題提起、実践の中での省察の持続的な積み重ねを通しての力量形成、およびそれを支える省察的な研究およびその機構としてのプロフェッショナル・スクールへの構想と展望なしには教職大学院というまったく新しい組織・機構を創ろうとする挑戦があり得なかったこともまたたしかなことです。わたしたちの小さな企図と大きすぎる歴史的な展望とつなぐプロフェッショナル・スクールという組織・制度への挑戦の意味に私たちの目を開いてくれたのがショーンであることを記しておかなくてはなりません。ショーンがデューイを継いで、現実の社会組織の革新とそのための学習過程とその組織のあり方をめぐり自ら実践と省察を重ね、そして広く事例研究を展開し、その研究としての組織化を進めてきたこと、そしてそれこそを新しい大学のあり方として提起したこと、そしてその提起に世界的な共鳴の渦が起り、困難な状況の中でその企図を継ぐ実践と研究が重ねられて来ていることが、私たちの取り組みにとって大きな支えてとなっていたこと、なっていることは疑いありません。

ラウンドテーブルの歩みと歴史的背景についてポイントだけを記すつもりでしたが、長い前置きになってしまいました。機会を改めて、私たち自身の長期的な実践記録として表していくことしたいと思います。

註

- (1) 国立公民館保育室運営会議編『子どもをあずける』未来社, 国立公民館保育室運営会議編『子どもを育て 自分を育てる』, 伊藤雅子『子どもからの自立 おとなの女が学ぶということ』未来社, 1975, (新版 子どもからの自立 岩波現代文庫, 2001. 社会教育基礎理論研究会編『社会教育実践の現在(2)』雄松堂, 1992. 村田晶子『女性問題学習の研究』未来社, 2006.
- (2) 松下祐『健康問題と住民の組織活動ー松川町における実践活動』勁草書房, 1981. 松下祐『住民の学習と公民館』勁草書房, 1983.
- (3) 長野県伊那市立伊那小学校『内から育つ子ら 小学校低学年における総合学習の展開』信濃教育会出版部, 1980. 長野県伊那市立伊那小学校『自ら学ぶ 教科・道徳・特活の核となる総合活動』信濃教育会出版部, 1981. 長野県伊那市立伊那小学校『学ぶ力を育てる』明治図書, 1982.
- (4) 辻智子「記録と教育研究ー社会教育実践の視点から」『教育学研究』82-2, 2015.
- (5) 信州大学教育学部附属長野小学校『総合学習の主張』明治図書, 1975. 信州大学教育学部附属長野小学校『総合学習の展開』明治図書, 1979.
- (6) 淀川茂重『途上』(信州総合学習の源流ー淀川茂重『途上』から生活科・総合的な学習へ) 信濃教育会出版部, 2005.
- (7) 堀川小学校『生きかたが育つ授業』上・中・下巻, 明治図書, 1984.
- (8) 奈良女子師範附属小学校『学習研究』1922～
<https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/nwugdb/z002/>
- (9) J. デューイ(宮原誠一訳)『学校と社会』岩波文庫, 1957.
- (10) I. カント 「汎愛学舎論」(カント全集 3 前批判期論集Ⅲ 岩波書店, 2003.)
- (11) I. カント 「理論と実践」(カント全集 14 歴史哲学論集 岩波書店, 2000.)
- (12) I. カント 「啓蒙とは何か」(カント全集 14 前掲). 柳沢昌一「近代教育の理念に関する二つの省察: 南原繁とカントにおける人格と公共性」, 『教師教育研究』2, 2009.
- (13) J. ハーバーマス『公共性の構造転換』未来社, 1973, 1994. J. ロールズ『道徳哲学講義』上・下 みすず書房, 2005. M. フーコー「カントについての講義」『ミッシェル・フーコー思考集成』10 筑摩書房, 2002.
- (14) D. A. ショーン(柳沢昌一・三輪建二監訳)『省察的実践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房, 2007. D. A. ショーン(柳沢昌一・村田晶子監訳)『省察的実践者の教育: プロフェッショナル・スクールの実践と理論』鳳書房, 2014.

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために
次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。

教職大学院 Newsletter **No.130**

2020.2.15 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp